

# マルチレベル分析による アクティブ・ラーニング型授業の効果測定 (7) —グループ目標がアサーションスキルに及ぼす影響—

○高比良美詠子 (立正大学)  
佐藤友美 (九州工業大学)

杉本英晴 (駿河台大学)

キーワード：アクティブ・ラーニング，アサーションスキル，マルチレベル分析

## 問題と目的

大学教育におけるアクティブ・ラーニング型授業への取り組みが，近年活発化している。アクティブ・ラーニングとは，「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法」とされる（中央教育審議会，2012）。そして，このような授業で育成される能力としては，汎用的技能・態度および，それを支える能力が想定されている（溝上，2014）。しかし，アクティブ・ラーニング型授業を実施することで，常に学生の能力が伸長する訳ではなく，効果が見られる条件を明確化する必要がある。

そこで，高比良他（2016）は，実習科目の中で実際に行われているグループワーク活動の内容に着目し，汎用的能力の1つであるアサーションスキルへの影響を検討した。その結果，授業内において発言活動が多い学生ほど自己志向のスキル（自己主張・自己統制）が伸び，協同活動が多い学生ほど他者志向のスキル（他者尊重）が伸びていた。しかし，アクティブ・ラーニング型授業の効果を決める要因としては，授業内に実際に生じたグループワーク活動の内容に加え，当該のグループ活動に対する個人の認識も影響する可能性がある。

そこで本稿では，当該グループにおける目標のあり方がアサーションスキルに及ぼす影響を，個人レベルと集団レベルの効果を分離できるマルチレベル構造方程式モデリングによって検討する。

## 方 法

**調査対象者** 大学生 199 名（女性 73 名，男性 126 名）。半期の実習科目で，オリジナルの心理尺度を作成するグループワークを，平均 6 名の固定メンバーで構成された 32 グループで実施した。

**質問紙** (1) 当該グループにおける目標：パフォーマンス目標（例，「よい成績を取りたいと思っていた」），メンテナンス目標（例，「グループの雰囲気をよくしようと努力した」）を測定する 5 件法の尺度を作成した。(2) アサーションスキル：金子ら（2010）のアサーション行動尺度を使用した。

**手続き** 第 1 回授業開始前（事前）に(1)を，第 15 回授業終了時（事後）に(1)と(2)を測定した。本研究の手続きは，調査実施校の倫理委員会の審査を受け承認された（承認番号 290076）。

## 結果と考察

アサーションスキルの各因子（自己主張，他者尊

重，客観的自己統制，説得交渉）に対する，当該グループの目標の影響を検討するために，Figure 1 の分析モデルを使用した。2 種類のグループ目標得点の級内相関係数はそれぞれ .06 と .14 であり，説明変数は全体平均による中心化を行った。

集団レベルでは，尊重スキルのパス(a)に有意傾向の負の効果が見られ，事前に尊重スキルが高いグループほど，事後の尊重スキルが平均的に低下していた。その他の(a~c)のパスはいずれも有意ではなく，集団レベルでは，グループ目標から，アサーションスキルへの影響は見られなかった。

個人レベル(f~h)では，一部に有意なパスが見られた。パス(f)については，4 因子の全てで有意な正の効果が得られ，事前のスキルが高い人ほど事後のスキルも高かった。パス(g)については，主張以外のスキルで有意あるいは有意傾向の正の効果が見られ，当該のグループ活動においてパフォーマンス目標を強く意識していた個人ほど，事後のスキルが高かった。グループ活動を主体とする授業で好成績をとるには，グループ内の協同が不可欠なため，実利的な目標がスキルの向上を促した可能性がある。一方，パス(h)については，尊重スキルで有意な正の効果が見られ，当該のグループ活動においてメンテナンス目標を強く意識していた個人ほど，事後の尊重スキルが高かった。なお，グループ全体での目標の共有は，個人レベルのパス(f)の強さに影響していなかった(パスd, e)。

以上の結果から，グループワークにおいてアサーションスキルを育成する上での，効果的な目標設定の在り方が示唆された。

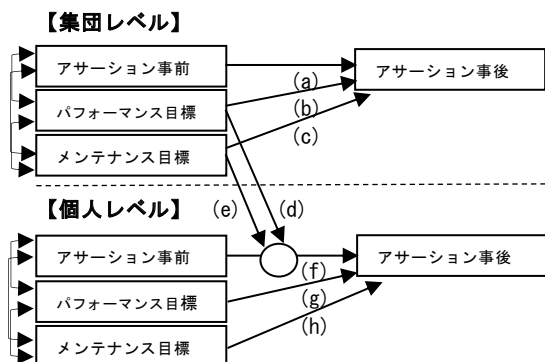


Figure 1 分析モデル（誤差項は省略）